

『徒然草』『花は盛りに』段の「大路見たるこそ」

—これからの日本語史研究に必要なもの—

佐々木勇

○、日本語の歴史的研究に期待されること

1 言語研究への言語史研究の貢献

使われている言語は、必ず変化する。

これについて、左の本を紹介した。

・コセリウ『うつりゆくこそことばなれ』（田中克彦・かめいたかし訳、一九八一年、クロノス）。『Synchronia, diachronia e historia: El problema del cambio lingüístico』スペイン語版第二版（一九七三）の翻訳。

・コセリウ『言語変化という問題…共時態・通時態・歴史』（田中克彦訳、二〇一四年、岩波書店・岩波文庫）。右と同じ本の翻訳。

・福島直恭（なおやす）『あぶない』が『あぶねえ。』にかわる時…日本語の変化の過程と定着』（二〇〇二年、笠間書院）

2 言語史研究への日本語史研究の貢献

日本語は、二千年近くの幅を持つ文献が現存している。

しかも、各時代に位相差を持つ各種文献が残っている。

としてそれらの読解に取り組む必要がある。そして、日本語史研究の成果あるいは日本語学的な関心に基づいて、問題を解決すれば、自己の研究に役立つというだけでなく、古典文学研究に一定の貢献を果たすことになるであろう。

（山口佳紀『大和物語』諸段の解釈をめぐって——日本語学からの貢献——）

山口佳紀には、『伊勢物語を読み解く…表現分析に基づく新解釈の試み』（二〇一八年、三省堂）の御著書もあり、文学・語学研究者共通の必読文献となっている。

一、教科書の元の元

次に、学部二年生に向けた授業を紹介した。

1、本文の比較

①教科書 花はさかりに（『徒然草 説話 枕草子』二〇一七年・文英堂から抜粋）

②注釈書 花はさかりに（『新編日本古典文学全集』から抜粋）
教科書の文章には、必ず、出典が書かれている。右の教科書の出典は、『新編日本古典文学全集』である。
両者本文を比較すると、教科書「隈なきを」——新編全集「くまなきを」など、意外な相違に気づかれる。

③烏丸本『つれ／＼くさ』慶長十八年（一六一三）刊本

『新編日本古典文学全集』の底本は、烏丸本である。

新編全集「くまなきを」——烏丸本「くまなきを」となっており、この部分は、新編全集は烏丸本のままであることがわかる。

烏丸本の原本が、『新編日本古典文学全集』編者の手を経て、

日本語は、位相別の、あるいは、各位相を対比した言語史を描くことができる。

3 日本文学研究への日本語史研究の貢献

学術誌「文学・語学」は、二〇一七年に「国語学小特集 日本語研究と日本文学研究との接点」という小特集を組んだ。

「文学・語学」という名の学術誌が「今でもなお、一つの接点を有している」と書かねばならないほど、文学と語学の専門化・細分化が進んできている。

しかし、少数ながら、つぎのような動きもある。

この特集号の巻頭論文から引用する。

日本語史研究は古典文学のテキストを資料として行われることが多い。そして、そのことが可能であるためには、資料としたテキストに何が書いてあるか、理解できることが必須である。ところが、日本語史研究者は、その内容の読解については、ほとんど古典文学研究者の業績に依存しているのが実情である。それらの読解が正確であれば問題はない。しかし、人間の業（わざ）として、もとより完璧なはずはない。したがって、日本語史研究者は、自らの問題

新編全集の本文になっていることを、学生に確認させる。最初の演習担当班の発表課題は、「新編日本古典文学全集の凡例を解説せよ。」である。

教科書の元を読むためには、かつての「くずし字」を読む必要がある。私の授業では、学部二年生から、一貫して影印本を使う。それが苦手だという学生もいるが、「くずし字」を讀みたいから卒業論文で日本語史を選択する、という学生も毎年いる。

④正徹本『つれ／＼種』永享三年（一四三二）写本

古典作品には、多くの異本が現存することを説明する。古典作品に異本があるということは、二年生段階では新鮮である。

授業では、テキスト版が出版されている影印を底本とする。『徒然草』の授業では、正徹本をテキストとしている。

2、研究テーマの発見

教科書本文とその元、さらにその元と源流を遡ることで、学生達は多くのこと（研究の萌芽）に気づく。

二、『徒然草』『花は盛りに』段の「大路見たるこそ」

つぎに、文学と語学とを結ぶ日本語史研究のつもりで行なった研究をお聞きいただいた。これについては、その後、論文化したので、左の論文を御覧いただきたい。

『徒然草』『花は盛りに』段の「大路見たるこそ」

（『国語教育研究』63号、二〇二二年三月）。

三、これからの日本語史研究に必要なこと

1. 習慣

① 古文獻（原本・複写物・画像）を閲覧する習慣。

② 古文獻を読む習慣。

③ 古文獻の読解から生まれた疑問を育てる習慣。

2. 習得

④ 日本語史研究法の習得

○ 何を知りたいか。

↓ これがもつとも大切。

○ それを知るために、どのような日本語の歴史を描くか。

↓ 歴史は、過去に存在していた事実ではなく、物語である。

選り出した過去の事態をいかなる観点で見ても、どのような歴史を描くかは、研究する者が決めなければならない。

○ 研究発表を聞き、論文を読む。

↓ 研究とは何か？ どうすれば、研究できるのか？

良い論文を書くためには、良い論文を読む必要がある。

学生の皆さんは、読むべき論文を論文データベースでキーワード検索しようとする。

しかし、その「キーワード」がまだ浮かばない状態では、論文データベースを検索できない。また、最新の論文は、論文データベースに未収であり、検索できない。

図書館・図書室の新着雑誌コーナーに通う習慣をつけ、最新雑誌を手にとってほしい。

⑤ 用例蒐集法の習得

3. 発信

⑥ 世界・後世に向けての発信

自分の研究が周囲の人々に理解してもらえなくとも、言語史研究に貢献する目的で、世界に向けて、また後世に向けて、研究を形に残しておこう。古文獻同様、研究も、未来への遺産としてデジタル化しておくことが望まれる。

日本在住の日本語史研究者は、世界に類を見ない豊富な古文獻に直接接することができる。

その環境を活かして、日本語の具体的な言語事象を記録することが求められている。

それとともに、長い歴史を持つ日本語の母語話者である幸運を逃さず、過去の日本語を歴史的に解釈することが、世界の、また後世の研究者から求められている。

以上のことを、学生の皆様に聞いて頂きました。

貴重な機会を与えて頂いた「新潟県ことばの会」の皆様にも、改めて感謝いたします。